

高校生らしい能動的・知的模索

小川原 正道

(慶應義塾大学法学部教授)

今回の受賞作にも、力作が並んだ。独自性と論理性、高校生らしさに溢れた作品群から受賞作を選出するのは悩ましかったが、文章の書き手としては、嬉しい悲鳴である。

小泉信三賞を受賞した福田論文は、「SNSが無い世界」を独自の観点から描き出した。著者は、「言語ゲーム」概念から秩序や関係性、その逸脱について説明し、ゲームに違反すると「排除」という暴力性が発生すると指摘した上で、ゲームはスライムのように不確かで変化を続けており、インターネットが摩擦と傷を増幅させているという。「リセット」や「排除」の誘惑に負けずに忍耐する「ネガティブ・ケイパビリティ」を回復する必要がある。本作は、能動的な努力に対する知的模索の成果として、高く評価された。「実学における古典」をテーマに論じ

た次席の原島論文は、学問と実生活を接続する普遍的な学問として実学を捉え、福澤論吉のいう「物理学」に注目する。著者は古典にも「継続性」という「普遍性」があるとした上で、小泉信三の主張を検討し、「実学」として有用な本は普遍的価値を有し、知識や知恵に役立ち、性急に利益を求めてはならないと説く。福澤、小泉の議論を的確に理解し、実学と古典の関係をうまく論じた作品だった。

佳作のなかで特に目を惹いたのが、「歴史とフィクション」を題材に、ホロコーストとパレスチナ問題の類似性を論じた野村論文である。かつてナチスが生み出した「虚構」が憎悪の「感情」を生み出したが、イスラエルは現在、ホロコーストを戦争と国民統合のために利用し、空気感と集団心理が良心を麻痺させているという。「創作」こそが「虚構」を克服する力を持つと主張する著者に、ひとりの人間としての覚悟を感じた。

同じく佳作の小仲論文と田中論文は、「真実」をテーマとしている。事実が伝達され、個人によって「真実」と認識されていくプロセスを検討した小仲論文

は、情報のコントロールや個人による異なった理解・解釈が存在していると指摘し、受信者側の個人が「情報の仕分け」をする必要を説く。ネット時代のリテラシーの重要性を説いた作品である。

民主主義をめぐる言説の真偽を再考した田中論文は、歴史的に見て、民主主義の放棄が暴力の支配を招いてきたとした上で、その脆弱性を理解し、相互的寛容と組織的自制心からなる「柔らかないガードレール」の重要性を説く。少数者に対するあたたかい眼差しを忘れない、たくましい姿勢が感じられた。

福澤や小泉を研究している者として、彼らの作品、とりわけ実学・古典論を高校生がどう読み、自らの論理体系のなかに位置づけていくのか、期待しながら候補作を読んだ。同じアニメの名台詞や辞書的な語義解釈が目立つのが気にはなったが、総じて、予想以上の手応えである。現実世界への問題意識、問題解決への方法論も具体的に示唆に富む。著者たちは、大学教育などの過程でさらなる「智」を身につけ、能動的な書き手として、世界に羽ばたいてほしい。

情報・真実・歴史をめぐる 思索

こいだとも
恋田知子

(慶應義塾大学文学部准教授)

生成AIの精度が向上し、文章作成はかつてないほど簡便で効率的となった。そのような時代に小論文を書く意義は何か。今回初めて審査に携わり、改めて考え、課題の設定に臨んだ。六つの課題のうち「真実」と「SNSが無い世界」に多くの論文が寄せられたのは、高校生にとって取り組みやすいテーマであったのだらう。自分の経験や社会的背景に基づいた問題意識が見てとれ、普遍的なテーマや現代社会の課題に真摯に向き合い、自らの言葉で論じる姿勢に触れ、その意義を再認識させてくれた。

「真実」という抽象的で哲学的な課題に対し、多くの論文ではアニメや漫画の台詞が取り上げられていた。高校生らしく、共感しやすい視点である一方、その範囲にとどまると、議論が一面的で、深みや説得力にも欠ける。小仲花さんの論

文は、独自の仮説に基づき情報伝達の過程を検証することで「真実」の構造を論じており、田中泰斗さんの論文は、現代の問題を例に多角的な視点で民主主義を再検証する。いずれもテーマを深く掘り下げ、「真実」がどのように形成され、我々の認識にいかなる影響を与えるか、具体的に明らかにした好論である。

「歴史とフィクション」では、歴史的事実がフィクションとして表現される要因や歴史認識に及ぼす影響を論じた力作が寄せられ、審査には嬉しい悲鳴をあげた。野村仁愛さんの論文は、パレスチナ問題を例に、歴史的背景に基づくフィクション（虚構）によって生じる負のイメージを指摘し、そこから脱却するためのフィクション（創作）の可能性を明示し、意義深い。

「実学における古典」も応募数に比して佳作に恵まれ、福澤諭吉の実学を問いつす試みも見られた。原島隆嘉さんの論文は、福澤や小泉の思想を検討し、実学と古典の結び付きについて丁寧に論じられており、テーマの理解と解釈、引用の手法も高く評価された。「もはや古典はすべての学問の基礎として精神的な役割

を果たす」との結びの一文に共感した。

「SNSが無い世界」では身近な体験に基づき、功罪を論じたものが多くを占めた。そのなかで、福田健心さんの論文は、課題そのものを論じるのではなく、インターネット社会における自己と他者の関係、そこで生じる問題や矛盾、さらに解決策を示す。一見してわからない「スライムの皮膚と牛」のタイトルの意味も読み進めるうちに明らかとなり、独創的で現代社会への洞察力や深い思索が窺え、小泉信三賞に相応しいと審査員の支持を得た。

なお、全体を通して、引用が多く、他者の意見に依存しがちである点は気になった。AIの発展で情報収集や整理は容易になったが、独自の視点や批判的に論じる力は益々重要となる。引用に頼り過ぎず、自分の考えを構築し、社会的な問題に対する深い思索の窺える小論文を期待したい。

次回で本コンテストは五〇回の節目を迎える。現代の高校生が投稿したいと思えるテーマを設定するのも重要な課題である。高校生が自由に思考し自らの意見を訴え、挑戦できる課題を模索したい。

真実の揺らぎを問う

こにしよし ふみ
小西祥文

(慶應義塾大学経済学部教授)

情報リテラシーが叫ばれるようになって久しい。インターネットやSNSを通じて欲しい情報が簡単に手に入る一方で、真偽の定かではない情報も増えたため、正しい情報を手に入れることは必ずしも容易ではなくなった。正しい情報が十分に提供されているにもかかわらずそれを必要とする需要者に届かないという現代社会の様相は、情報市場における需要と供給のマッチング摩擦の問題として既存の経済学の枠組みで説明可能である。

しかしながら、近年の社会情勢は、これまでとは異なる次元の新たなリテラシー問題を提起しているように思える。現代社会は、専門知の欠如による誤った因果関係の理解が、より多くの人々に拡散され、重大な社会的意思決定に反映される危険性を孕んでいる。例えば、昨年の米大統領選挙では、インフレや経済対策における失敗が民主党敗退の一因である

とされた。コロナ下の市場環境要因や旧トランプ政権下の政策を起因とするインフレを抑制する努力をしてきた民主党政権が敗れ、さらなるインフレと経済的混乱をもたらす可能性が高い政策を公約として掲げたトランプ氏が勝利したというのはなんとも皮肉である。専門知を学ぶことの重要性を意味するだけではなく、専門知への理解の格差が社会的分断を生み、重大な社会的意思決定に繋がってしまうという現代社会の難しさを如実に表すものであろう。

このような真実の揺らぎが存在する社会をどう捉え、生きていくべきか？ 今年の受賞作品は、そのような問いへの多様な解答と示唆を示すものであった。

小泉信三賞を受賞した福田健心さんは、現代のネット社会が抱える矛盾からスタートし、その矛盾への対策は「排除とリセット」によって「SNSが無い世界」を作ることではなく、他者の意見や情報を取り入れながら自己変容を繰り返す「スライムの皮膚」を持ち、すぐに答えがでない問題をゆつくりと考え続ける「牛」になることだと主張する。論理性に優れているだけでなく、ウィットと他

者への思いやり溢れる書き様がとても印象的であった。

次席の原島隆嘉さんの論文は、「実学における古典」とは何かという問いに真つ向から挑んだ意欲作である。多くの古典的名著を丁寧に引用しながら明快な論理を展開しつつ、学問の実生活への役立て方を考えることの重要性を説く福澤の思想と古典から普遍的な学びを得ることの重要性を説く小泉の思想をみごとに融合させることで古典の実学性を主張する。

佳作の三作も現代社会の揺らぎを問う良作揃いである。小仲花さんは、「事実」が「真実」へと解釈されるプロセスを事例に基づく仮説の検証という独特のスタイルで議論することで、メディアリテラシーの重要性を明らかにしている。田中泰斗さんは、民主主義への信頼が揺らぎポピュリズムが台頭するプロセスを丁寧に記述しつつ、対話と相互的寛容こそがあるべき民主主義社会だと主張する。野村仁愛さんは、イスラエル・パレスチナ問題について歴史を紐解きながら丁寧に描写しつつ、歴史における虚構と憎しみの連鎖から何を学ぶべきかを問いかけてくれている。

「ドリハラ」を吹き飛ばせ

たにくち かずひろ
谷口和弘

(慶應義塾大学商学部教授)

「ドリハラ」。皆さんは、この言葉を聞いたことがあるだろうか。高部大問氏(商学部准訪問研究員・商学部松下政経塾寄附講座講師)の著書『ドリーム・ハラスメント——「夢」で若者を追い詰める大人たち』(イースト・プレス、二〇二〇年)の

主題の略語で、二〇二二年元旦の『日本経済新聞』第一面でも取り上げられた。

主に日本において、若者が大人——親や教員などに「夢をもちなさい」「将来のビジョンをもちなさい」と定型的な指導をうけ、追い詰められることを表す。ドリハラがもたらすのは、若者の心の内側から生まれた夢やビジョンではない。むしろ、大人の「外圧」によって、若者がその場を取り繕うために捏造した空虚な言葉の羅列ではない。

ここで問いたいのは、将来的な進路の模索にとどまらず、物事に取り組むモチベーションが内側から生じたものか、外

側から課されたものか、という一点に尽きる。「第四九回小泉信三賞全国高校生小論文コンテスト」に応募した皆さんは、「なぜ論文を書くかと思ったのだろうか」「なぜこのコンテストに応募しようと思ったのだろうか」「自分を取り巻く世界への関心」あるいは「世界で生じている不正や不公平にたいする義憤」。さもないれば、「先生にすすめられたから」あるいは「親に紹介されたから」など、いろいろなきっかけがあったにちがいない。

しかし論文を執筆するうえで、そうしたモチベーションは何より大切だと思う。論文を書くことを決めたのも、実際に論文を書いたのも自分である。論文を書くうえで、自分がテーマを選んだ理由とはもとより、テーマに坎する基本的な疑問ともいえるべきモチベーションは肝となる。そこから、具体的に組み立てるモチ・クエスチョンを設定し、これを特定の視点や方法にたよりながら解明・分析していく。その結果、独自の発見や新鮮な主張につながるとすれば、その論文は見事に成功ということになる。

今回も高校生特有の若い感性にもとづいた新鮮な主張を展開している多くの作

品群に出会うことができ、とても心強く感じた。小泉信三賞に輝いたのは、ケアの重要性に注目しつつ、社会の道徳的問題にたいして独自の視点で切り込んだ福田論文であった。本論文にたいしてほすべての審査員がとても際立った評価を与えていた点が、いまだ印象に残っている。また、次席に選出された原島論文は、実学の意味について深掘りし、実学と過去からの贈り物」としての古典とのあいだの関係を丹念に論じていた。さらに、佳作として選ばれたのは、民主主義の再検討を試みた田中論文、パレスチナ問題の歴史的考察を試みた野村論文、そして真実の本質に迫ろうとした小仲論文だった。

総じて今回の応募論文について述べる、論文を書くにいたったモチベーションがみえにくい点、そして引用や形式への注力が過剰である分、大人の定型的な指導を吹き飛ばすほどの型破りな若者らしい爆発力を感じるにはいたらなかった点を指摘しておく。「大人にしたがうことが、つねに正しいことだとは限らない」。このことをふまえたうえで、形式にとらわれることなく、もっと自由に発想し、もっと大胆に執筆してはどうだろうか。

韋編三絶

早川 浩はやかわ ひろし(株式会社早川書房代表取締役)
(社長・慶應義塾理事・評議員)

「一年の計は元旦にあり」と言うが、いつ終わるかも知れない戦争、世の混乱をよそに、辰年の二〇二四年こそは、と昇り龍を期待して新年を寿いだ^{ことほ}が、折しも元日に発生したM七・六の能登半島地震、羽田空港の飛行機事故。真逆の暗澹たる年明けとなってしまった。

さて、佳作入選の一作目、小仲さんの「真実の構造を紐解く」は、「真実」を見極めるには情報の受け取り手にも相応のリテラシーが求められると、偽情報が蔓延^{はびこ}る現代に警鐘を鳴らす。最初に問題提起とその結論を想定したうえで、論理的に構成されており、分析方法も分かりやすい。

同じく佳作、田中さんの「民主主義の揺らぎと私たちの『真実』」は、民主主義が本当に最善の政治形態かという命題を、ナチスドイツの例などを踏まえて検

証していく。脆弱な民主主義を守るためには、皆が気概を持って独裁と闘う姿勢が重要と結論づける、志の高い論文だが、「真実」というテーマからは若干乖離しているように感じたのは、私だけだろうか。

野村さんの「花束を投げる」ホロコーストとパレスチナ問題の類似性みる虚構」は、国家が都合のよい側面のみをプロパガンダとして利用することによって、それが真実として歴史になっていく過程を、現在のガザ紛争と過去のホロコーストを比較しながら丁寧に分析している。こうした教訓を歴史上の出来事とせず、現在を生きる自分自身の問題として捉えている点に好感を持った。

次席は原島さんの「学問の基礎たる古典。私は漢詩や漢文、そして紫式部の『源氏物語』、はたまた志賀直哉などの古典を幅広く読んでいないと端正で深みのある文章を書くことは難しい、と周りの人に常々言っている。この論文は「古典は実学足り得るか」という命題を、「実学」の定義から説き起こし、福澤諭吉の『学問のすゝめ』や丸山眞男、小泉信三などの著作を引用して明快にまとめている。

「古典はすべての学問の基礎として精神的な役割を果たすといっても過言ではない」という結論はまさに我が意を得たりだ。

小泉信三賞の受賞作は福田さんの「スライムの皮膚の牛 あなたと私の傷とケア」。「SNSが無い世界」という課題を、哲学を通じて論じる視点が独創的だ。ドゥルーズの『リゾーム』を引いて、従来の縦型秩序を横に広げる関係性へと変える役割を期待されていたインターネットが、実際には管理社会を生みだしている^{と書き出し}、ブラッドベリの『華氏451度』やウィトゲンシュタインを引いて論を進めていく。漱石の「牛になる事はどうしても必要です」という言葉の扱い、そして「スライム」「傷」といった比喩の使い方も巧み。文章も明解で小泉賞に相応しい秀作である。

読書は考える力の基礎となり、長く読み継がれている書物は人生の針路となる。未来を担う高校生諸君には、ぜひこうした数多くの作品に触れてほしい。

来年の本賞は記念の五〇回を迎える。心を打つ論文にまた出会うことを切望して。

未来に点す灯り

町田智子^{まちだともこ}

(公益財団法人文字・活字文化推進機構専務理事)

ウクライナやパレスチナをはじめ、今も各地で続く戦争や紛争。人類の想像をはるかに超える急激な技術革新。地球温暖化による大規模災害、パンデミック……。SNSで瞬時に世界がつながる一方、フェイクニュースが横行、分断や対立が深まる社会で、人々はますます先の見えない不安と混沌の中にある。そうした時代を生きる高校生たちの論文は、多様な文献・資料を駆使し、多角的かつ鋭い視点で分析しながら、他者への優しさと希望を失わないという点で、光彩を放っていた。時に私を勇気づけ、未来への灯りを点してくれた。甲乙つけ難く、評価に悩みながらも、新鮮な驚きや気づきがうれしく、優れた論考の数々に對し、まず謝意を表したい。

小泉信三賞を受賞した福田健心さんの「スライムの皮膚の牛」は、表題から意表をつかれた。インターネットの海を哲

学者ドウルーズの「リゾーム」の関係性から解き明かし、その海流で自分と相手の価値観の摩擦と傷をいかに癒し乗り越えていくか、独自の視点で示した。相手の価値観と差異をも肯定する利他的なケアで、生成変化する「スライム」の説得力。夏目漱石が芥川龍之介らに記した「牛」に象徴される「焦らず深く考え続ける姿勢」が「スライムの皮膚」を纏う時、「ネガティブ・ケイバビリティ」を取り戻して性急な「リセット」や「排除」を脱し、共存へと導くという非暴力の思想をテンポよく論理展開し、秀逸だった。

次席の原島隆嘉さんの論文は、普遍性をもつ古典を実学として役立てる読み方について、小泉信三の著書なども引きながら考察。先人から受け継がれた知識や知恵を咀嚼して自らのものとし、「本質的な学び」を続けることで、古典はその精神において学問の基礎たたりうるとした。

佳作三点のうち、小仲花さんの論文は、真実の構造の構成要素について、四つの仮説を提示。情報が発信者から受信者へ伝わる各段階で、統制や異なる理解・解釈が介在する可能性を丁寧に解説し、メディアリテラシーの重要性を説いている。

田中泰斗さんの論文は、一気に読ませる力を感じた。民主主義の国が実は世界の約一割に過ぎず、むしろ減少傾向にあるという衝撃。ヒトラーによるナチス独裁政権確立までの過程に触れ、トランプ大統領の、社会から取り残された人々の不満や怒りを吸収し、支持拡大をはかる手法と重なることを指摘した。民主主義が次善の選択肢だとしても、社会の分断を生まぬよう、気概を持って相互理解や他者への配慮、公正さの実現を目指し、「対話」を尽くす努力の継続を提唱している。

野村仁愛さんの論文も鋭い指摘に満ちていた。ナチス・ドイツがユダヤ人迫害を正当化し、社会を巻き込んでいく虚構の戦略を、現在のパレスチナ問題と重ねる。迫害を受けた国が「生きながらにして死んでいる」ガザの現況を生み出している皮肉。「私にできること」を深く見つめながら、長い歴史と各国の思惑が複雑に絡み合う、この難しい問題に果敢に取り組んでいることも評価できる。

今回同様、来年も多くの素晴らしい論考に出会えることを期待したい。